

シリーズ 先生(十五)

小学校と大学の教師からうけたもの

吉田 武雄

はじめに

小学校以来たくさんの方に教わってきました。担任だった教師だけでも、十人余になります。担任外でも私の人間形成に特に影響が大だったと思う先生との関係をあとづけてみます。

アスリートで芸術家だったK先生

小学校三年生から六年の二期期末までの担任が、K先生でした(三学期には高等女学校に転任された)。先生は、初対面の時は長髪でしたが、間もなく兵隊のように短髪にしました。その年、尋常小学校は国民学校初等科になり、一月八日には米英との戦争に突入で

した。寒い校庭の風景と何かすごく緊張した感覚を記憶していますが、米英とは何か全く不明でした。今とは違って情報量も質もお粗末でした。町内にはラジオだつて普及していませんでした。

K先生は、1940年代では稀にみる長身でがっしりした体格でした。放課後に狭い屋外運動場の砂場でよくハイジャンプの練習をしていました。新潟師範学校では高跳びで学生大会全国一を得て、暫くは記録が破られなかった、と聞きました。

ときには廊下で中庭の樹木を油絵に描いてもいました。研究所が2000年にミレニアム美術展を新潟市に開いたとき、先生の友人の絵描きの絵が出品されて、それについて電話でお聞きしました。「僕は、絵描き

になるのは諦めて陸上競技に励んだが、○君は絵の道をととり、その出品作は注目されたものだ」と教えてくれました。

四年生の秋、鉄棒の学習がありました。校庭の鉄棒は私には高くてジャンプしても届きません。木登りの要領で柱を登り鉄棒を握り、なんとか尻上がりをやりました。その工夫を先生は認めてくれたようでした。

それをきっかけに蹴上がりに挑戦し、帰宅してからまた学校に行き練習を重ね、ほぼ一週間できれいに決まるようになりました。この学期の体育の評価は、初めて五段階評価の四に当たるのを得ました（当時は優良、可の絶対評価で良上があった）。

先生その評価が励みになり、運動神経の鈍い自分でも努力すれば何とかなると、そして今日まで私の身体活動の指針になりました。

た、たこれは、私の勝手な思い込みです。教育勅語体制下の学校は、気軽に先生に質問などできませんでしたし、先生も教科書を教える一斉授業が主で、子どもらを自由に活動させるなど許さない文化です。付度が目下の者の習性でした。「先生はきつとこう評価して下さるだろう」と思い、行動するのが習性でした。

ユニークにいじめに対処した先生

K先生は、その頃三〇歳代。五年生のある授業を少し早めに打ち切り、何も説明なしに教室を出ていかれ、同時に一人の婦人が入りました。H君の母でした。「女学校を出ている人を芸者とは、なんという心得違いい」とひとしきり説教。

H君は、弥彦山の近くから転校してきた子でした。彼を芸者の子と行って、かまったのでした、いじめです。いじめは収まりました。成績優れた彼は、後に医師になり関東地方の大きな病院長になりました。

母親のお説教は、私たちには新鮮で効果があったと思います。なにしろ当時の学校は教育勅語・国定教科書にしっかりと縛られて、授業はただ静かに聴くだけ。K先生の行為も果たして校長の許しを得ていたのか、それなしに教室を二時的に空けたのか？ 後年、私が中学教員になってK先生は苦渋の選択をひとりで行ったものと推察しました。

教科書を教える授業が普通でしたが、図画は個性が発揮できました。K先生は印象派風の写生画を指導しました。二、三年先輩の図画は教科書の通りに描き、

お手本そっくりの絵が体育館に張り出されていました。個性がだせたのは綴り方にもありました。ある時自習になり自由作文が課せられ、中庭の風景を描写しました。後でそれらを読んだ先生は、感情をあらわに褒めてくれました。まだ習ってない語句をうまく使ったなど。その例には私の作も入っていて、「ひよつとして文章がうまいかも」と妙な自信になりましたし、読書も好きになりました。

この頃の学級人数は、学童疎開の児童が来て五〇を超えていました。先生から児童に声をかけるなどは、ごく稀な場合だけでした。

子どもの声を聞く姿勢に変わった戦後

一九四五年三月、初等科を終わり新学期から高等科へ通学しましたが、教室で授業を受けた記憶は殆どありません、授業停止になったから（決戦教育措置要綱・三月、閣議決定）。高等科以上の生徒は勤労働員になったのは、勅令（戦時教育令・五月）でした。六月から一二歳の私らまで機械工場に動員で、先生から放置された感でした。もちろんお国のためと喜んで通いました。八月一日夜、米空軍の焼夷弾爆撃は家も学校も市役所

も焼きました。着の身着のまままで二キロくらい離れた小学校に避難しました。やがて終戦でした。焼け出された市も学校も、機能を失ってしまいました。

一〇月に、魚沼のK町の学校に転校して教科書に墨を塗って、軍国主義からの解放が始まりました。先生方が、生徒の声を聞くようになったのが新鮮でした。ある日、二世の米軍兵士が銃を肩にかけ教室を訪れ、私たちに入れ墨をしていないかなどと調べました。そのあとで先生は、どのような感じを持ったか小紙片に書かせました。

一九四七年、教育基本法、新憲法が公布。新制中学校三年になり、新聞紙を綴じたような教科書でしたが、それを教えるのでなく、現実の事象の中から民主主義を学ぶ教室に変わりました。戦争帰りの教員が中国の体験を語ってくれました。極端な物資の不足の暮らしにも明るい雰囲気がありました。おそらく今の子どもよりは幸福感や自己肯定感が強かったですでしょう。

N先生は生き方のもとを示してくれた

私は、高校は定時制（夜間）でした。昼は機械工場で働き、四年間の通学の後、新制の新大教育学部長岡

分校に入学できました。五年ぶりに昼間から勉強できることに戸惑いさえ感じる日でした。その夏は、三百万人の死傷者を出した三年余の戦火が朝鮮半島で休戦に。しかし日本は、再軍備を目指す逆コースが進行していました。池田・ロバートソン会談は、秋に始まっています。

N先生は、社会学を教える関西人でした。一高、京大、同大学院をでて召集され中国大陸で敗戦を迎えた戦争体験者でした。強い社会的関心を持ち、「戦争と平和」には体験から厳しい態度をとっていました。

講義が良かっただけでなく、例えば試験は何を持ち込んでよく、時間も無制限でした。旧制高校中退のS君と二人で教室が暗くなり、寒くなっても書き続け、先生もオーバーを着て付き合ってくれました。

少なからずの学生が、先生宅を訪れて話し込みました。安月給の中から奥さんとともにもてなして下さり苺に練乳をかけて食べるなど都会風を知りました。奥さんを名前で呼ぶのや「ありがと」と言う、近代的な夫婦像をそれとなく学びました。

分校は、二年制で三、四年生は新潟市に行く仕組みでした。先生は、それらの先輩を引き合わせてくれ、

大いに刺激を得ました。三年生になった時、先生は内地留学で東京大学に一年間行きました。秋のある日、学生寮組織の集会在東京にあり、夕刻に散会しましたが、宿泊が保障されません。やむを得ず先生の宿に転がり込み、一つ布団に休ませてもらいました。

翌日は、田端の宿舎から東大まで連れて行ってもらい授業も聞き、午後はゼミにも出席させてもらい特別な経験をしました。数人が、厚い原書を母国語のように読み、論議する学者やその卵に接して驚きでした。

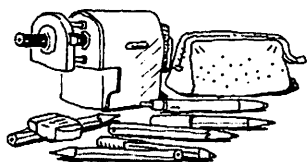
先生とはその後、夏休みの二泊三日を使つて、勉強会を十数年続けました。信濃や妙高など涼しい宿に教員のみならず研究者、新聞記者、編集者など色々な職種の人が集まり、予め読んできた書籍をもとに自由闊達に論議し、私には、教員として視野を広げるのに役立ちました。先生はこうやつて人を結びつけることに意を尽くして、自分の後輩たちを学ばせてくれました。

先生は、自身が中学生の時に東大を出たばかりの担任の教師に影響をうけ、教育者になろうと決めた、と述懐していました。別の大学に移つても教養部の教員でした。

「道徳」が「特別な教科 道徳」になり、小学校で

四年目です。私は、小学校の修身を六年も教えられたが、生きる指針になった記憶はありません。むしろ愛読書の『あま玉杯に花うけて』『少年賛歌』（両者とも佐藤紅緑著）の少年たちに憧れて、彼らのようになろうと努めました。「特別な教科 道徳」も修身と同じ運命を辿ると思います。先生との人間的な交流こそ子どもらに心に残る影響を与えるのでしょうか。

（よしだ たけお・所具）



命を育む緑のカーテン

今年の夏は、ゴーヤ料理を食べる機会が減った。それは、「緑のカーテン」からのゴーヤ収穫が思わしくなかったからだ。日照不足にたたられたようだ。我が家の東側の大窓は、例年、緑のカーテンに覆われている。今年は、収穫したゴーヤの実からとった種を発芽させ、プランターに移植して育てた。「種から育てた植物は強い」と思ったからだ。収穫量については期待はずれだったが、ゴーヤはシーズンを通してすくすくと育った。温暖化傾向のため、温かい秋が続き、11月になっても青々としていた。

緑のカーテンの生長につれて、多くの生き物が姿を現した。若葉は昆虫の幼虫達の餌になった。黄色い花の蜜に誘われ様々なチョウチョやハチ類が辺りを飛び回った。それらを捕食するカマキリを目にすることもあった。また、蟬や小鳥が、体を休めながら鳴いていたことも。

たった一間半幅の緑のカーテンが、命を育む「ゆりかご」の役割を果たしていたようだ。来年は、アサガオのカーテン造りにも挑戦したいと思う。（小東）